皇太子と馬車
皇太子の命に逆らい
危ない貴族の領地に向かった
勇者の物語

都に向かう
馬車の中

ガタ

ガタ

その中には
勇者が
不安そうに
座っていた

それは
真向きに
座っていた人が
帝国の皇太子で、

ガタ

ガタ

彼は今
凄くご機嫌斜め
だったせいだ

……！

先日

君の領地の
兵士たちで
もう十分であるはず

却下する

皇太子、カーアルは
ラコフ侯爵家の
長男である
デリック・ラコフが
要請した
勇者の派遣を断った

しかし
そのモンスターは
とても危険で
勇者の派遣が
必ず必要です…！

何を今更

ラコフ領地に
毎年春になると
出没するモンスターで
はないか

不快な奴…
ここ最近、余計に
勇者の周りを
うろついてる

富強で五本の指に入る
君の家門で
このような
要請をするとは
不思議だな

以前のように
勇者をいじめては
ないようだが
前例があるから
できるだけ
引き離せないと

細かいものでは…

勇者はそんな
細かいモンスターの
退治のために
呼べる者ではない

帰ったら
殿下に
怒られるかな…

しかし勇者は
皇太子の決定に
反して
ラコフ領地を
訪ねた

はぁ

はぁ

いや、本当に
あっという間だな
流石凄い…

僕が言ったっけ？
実はずっと
君の実力を凄いと
思っていたと

殿下も後で
よくやったと
思ってくれる
はずさ

だから問題なく
仕事を終えて
堂々と
殿下のもとに
帰ろう…！

その者が近づくと
私の命だと言いながら
席をはずせ

せっかく殿下が
気を配って
くださったのに…

私もこの人が
苦手…でも
人々の命が
かかっている
事だから…

堂々と…

殿下の元に…

ふぅ

帰…

帰らないと…

ふぅ

ピンッ♥

ふふ…
いい格好だな
勇者よ

体が温かくなって
リラックスする
だけの薬だから
ご心配なく

ピンッ♥

勇者は
デリックがくれた
お茶を飲んで
抗拒不能になって
しまった

ダメっ…♥

へんたいヤロ…

ちゅぱっ

ちゅぱっ

ピクッ

ビク

あ…！

あっ♥

はぁ

皇太子の命令も無視して僕の領地に飛んで来たのは…

はぁ

いや…♥

やはりこんなコトを期待したのかな

ひくひく

ひくひく

体が熱い…

とっ

とっ

とっ

ふうっ…！

んっ…！

力が
全然入らない…

もう僕を
受け入れる
準備をしていたのか

ぐちゅっ
ぐちゅっ

んっ…！
あっ…！

とんでもない
尻軽だな

アグッ…！

ふ…！

マジで入ってくるっ…！

ダメェッ…

ぎゅっ

やめ…！

ぎゅっ

大嫌いな奴が私の体の中に入り込んでいる…！

はぁ

さてそれじゃー勇者はどんな味か味わってみようか

ふぐっ…

ぎゅうっ

激しくやってあげるから犬みたいに吠えるとこ見せてくれよ♥

イヤだ…！

…？

殿下…

本当に
カーアル殿下が…

こうして
勇者と皇太子が
一緒に
馬車に乗って
いたのだった

皇太子殿下に
いつも
助けられるばかり…

ちらっ

ずっと…
一言も
おっしゃらず…

ガタ

ガタ

もう
うんざり
なんだよな…

ガタ

うっ…

ぐらっ…

まだめまいがする…

あっ

…!

あ…

…
ちゅっ
ふっ…
ぞくぞくぞく

ぞくっ

殿下と舌を混じるだけでイキそう♥

ちゅっ

ちゅっ

頭がビリビリする♥

カーアル殿下…♥

嫉妬と欲情が入り混じった密閉された馬車の中

二人の青年が取り乱して獣のように絡み合うのは当然の事だった

ゆっさ
ゆっさ
ズボッ
ちゅっ
ちゅっ
ズボッ
ズボッ
ん〜〜!!
勇者とカーアルは
一度も唇を離さずに
すっと
お互いを貪った

ふぅ〜！

ブルブル

スリ♥

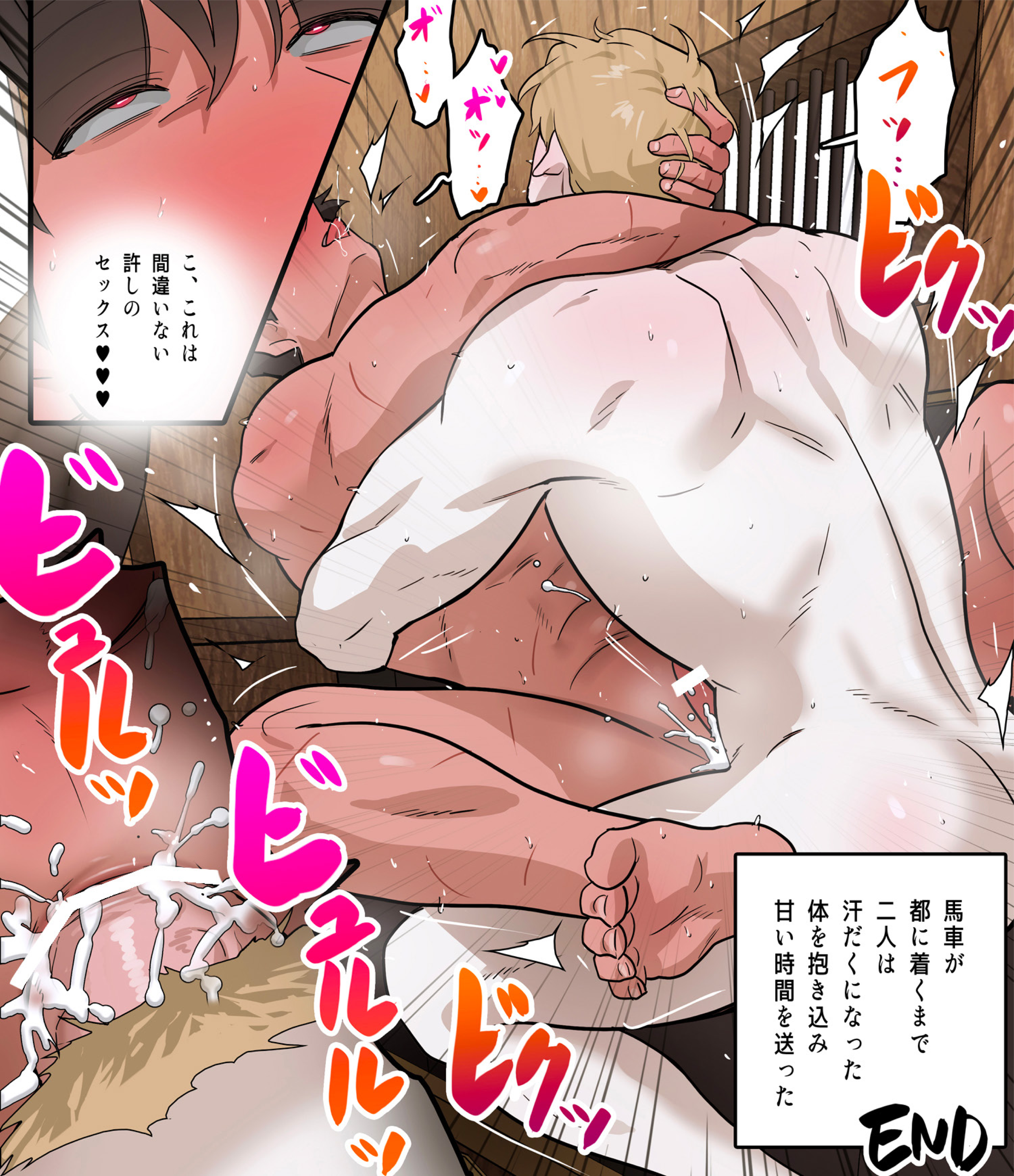
スリ♥

ちゅぷ

うぅん〜

ちゅぷ

んっ…


こ、これは
間違いない
許しの
セックス♥♥♥
ブッ…ビクッ
オッ♥
オッ♥
ビクッ
ビルビルッ
ビルビルッ
馬車が
都に着くまで
二人は
汗だくになった
体を抱き込み
甘い時間を送った
END